

おはようございます。

ようこそ土浦めぐみ教会の礼拝にお越しくださいました。

今朝は、2000年前に聖霊が降臨されたことを記念するペンテコステ礼拝です。

ともに、その喜びの恵みを味合わせて頂きましょう。

前奏がありますので、静かに心を静め、神様に目を向けていきましょう。

聖歌隊の特別賛美があります。

「ババイエトゥ」、2000年前主イエスの弟子たちに聖霊が降臨された際、様々な言語で福音を語り始めたことを思い、ケニア・スワヒリ語の主の祈りを聖歌隊が賛美いたします。

どうぞお聞きください。

それでは、聖書の御言葉から、ペンテコステに臨まれた聖霊の恵みを共に分かち合っていきましょう。

「聖霊のバプテスマと聖霊の満たし」

使徒の働き 2 : 1 - 4

May.28.2023

使徒の働き 2 : 1 - 4 (パウロ)

Preface

歴史的な聖霊降臨の事件は、イスラエル・ユダヤの三大祭りのうちの一つ、五旬節の日に起こりました。

この五旬節をギリシャ語でペンテコステと言い、ペンテコステとは、五十日目、または五十番目を意味する言葉です。

では、いつの日から50日目なのかと言いますと、イスラエルの民たちが出エジプトをする際、家畜を屠って、その血を家の門柱と鴨居に塗ったことによって、主なる神様がエジプトのすべての初子は打ったけれども、イスラエルの民たちはその裁きを過ぎ越して頂き、命救われたことを祝う過ぎ越しの祭りから数えて、五十日目です。

50という数は、イスラエル文化における完全数字である7の7倍49に1を足した数字であり、イスラエルの民たちにとって、日本風に言うならばとても縁起のいい数です。

また何よりも、イエス様が十字架に架かれたのは、罪の身代わりの家畜が屠られ、その血によって救われたことを祝う過ぎ越しの祭りの時であり、主イエス様こそ、世の罪を取り除く神の子羊であられるということの表われでした。

そして、このイエス・キリストを通して成し遂げられた神の救いのわざが、聖

霊が人々に降臨することをもって完結したことを表明しているのが、ペンテコステの聖霊降臨です。

五旬節の聖霊降臨の出来事は、人類の歴史を神様の目から見た救済史という、人類の歴史のすべては神の救いのわざに帰着し、神の救いこそ歴史の核であるという観点から見ますと、唯一無二の出来事であり、人類の歴史において最も大事な人類の転換点とも言うべき歴史的な事件です。

つまり、「人が神とともにいても死ぬことがなくなり、永遠に神とともに生きる者へと造り変えられた」という祝福の表明が、ペンテコステの聖霊降臨です。

この、聖霊が人々に臨んだという事件は、天の御国の観点から、霊的視点から見た時、とてつもなく重大で、大きな出来事でした。

Part One

ペンテコステの聖霊降臨の出来事を考えた時、一つ疑問が湧いてきます。

それは、「神であられ、神の霊であられる聖霊がペンテコステの日に、人々に降臨される以前は、聖霊なる神様が働かれたことはないのだろうか」という疑問です。

創世記1：2を見ますと、天地創造の時、「聖霊が大水の面の上にあり、その水の面を動いておられた」ことを証言しております。

同じく創世記1：26には、神が人をお造りになった時、「人をわれわれのかたちとして、われわれの似姿に造ろう」と神様が宣言なさり、父なる神、御子なるイエス、聖霊なる神の三位一体の神様が、私たち人間を創造されたことをはっきりと明かしています。

また、ヨセフは、聖霊の下さる霊的洞察力によって、ファラオの難解な夢の解き明かしを行い、モーセやヨシュアは、聖霊なる神様の助けの中で、出エジプトとカナンの地征服という大業を成すことが出来ました。

ダビデには、聖霊が激しく下り、あの大変なイスラエル王としての生涯を全うすることが出来ました。

新約時代に入り、貧しい者達の住まうナザレという町のマリアという女性が、処女の身でありながらイエス・キリストを身ごもったのも、やはり、聖霊のみわざでした。

ペンテコステの聖霊降臨以前も、聖霊様は、人間生活の中で働いておられました。

それにもかかわらず、ペンテコステの聖霊降臨が重大なのは、それが、人々を救うためのイエス様の死と復活、そして天に上られた結果、成し遂げられたものであったからです。

即ち、イエス・キリストを通して人類をお救いになりたいと思われた神様の摂理が、聖霊降臨で完結し、その時から本格的に、教会の時代が新たに幕開けしました。

また、ペンテコステの聖霊降臨は、ある特定の人だけに起こったことではありませんでした。

ペンテコステの聖霊降臨は、一緒に集まって祈っていた使徒たちと信徒たちの群れ、つまり、共同体という集団に訪れた集団的出来事であり、その共同体が初代教会として、教会の歴史がペンテコステの聖霊降臨とともに始まりました。

教会というキリスト者の群れを通して、キリストをあらわす時代が幕開けしたのです。

Part Two

このペンテコステの聖霊降臨に関連して、イエス様が天に上られる直前、集まっている弟子たちにお語りになった言葉があります。

使徒の働き 1 : 5 (パウロ)

このイエス様が仰った「聖霊によるバプテスマ」こそ、正に、ペンテコステの聖霊降臨でした。

だとすれば、ここから私たちは、教会とは何なのか？ 教会の意味を新しく整理することが出来ます。

教会とは、ただ単純な人の集まりではなく、聖霊のバプテスマを受けた人たちの集まりです。

聖霊のバプテスマを受けなければ、教会も、教会員も、はなから存在自体が不可能だということです。

そして、この絶対的な聖霊のバプテスマ、聖霊降臨に関して、今日の聖書箇所使徒の働き 2 : 2-4 が、このように証言しています。

使徒の働き 2 : 2-4 (パウロ)

多くの人たちが、この箇所を根拠として、聖霊のバプテスマは、必ず神秘的でありながら、熱いものでなければならぬと理解しています。

しかし、この聖書箇所を丁寧に詳細に調べてみますと、聖霊が臨まれた時、「突然、激しい風が吹いて来たような響きが起こり」、また、「炎のような舌が分かれて現れ」と、伝えてくれています。

聖霊様が望まれた時、「突然、激しい風が吹いた」とか、「ゆらゆらと揺れる炎が見えた」というように、断定して、表現してはいません。

つまり、この表現は、聖霊様が望まれた時に、そこにいた人たちの主観的で、個人的な感じ、感覚、印象、体験であったということです。

イエス様が、キリストとして公生涯を始めなされる時、ヨルダン川でバプテスマのヨハネから水のバプテスマを、水の洗礼をお受けになったことがありました。

その洗礼をお受けになった際の状況を、マタイの福音書が伝えてくれていますが、そこでの聖霊の下り方については、使徒の働きとはまた違うように記されています。

マタイの福音書 3 : 16 (パワポ)

水の洗礼をお受けになったイエス様が天を見上げなされた時、天から、聖霊様が、平和と静寂の象徴である鳩のように、イエス様に臨まれました。

同じ聖霊であるにもかかわらず、弟子たちとイエス様の体験は、このようにはつきりと違いました。

しかし使徒の働き 2 : 4 を見ますと、聖霊が弟子たちに降臨された後、「そこにいた皆が、聖霊に満たされたようだった」とか、「満たされたように見えた」とは記していません。

聖霊の満たしに関しては、「皆が聖霊に満たされた」と断定しながら、表現しています。

これは、そこにいた人々全員が、聖霊に満たされたいのちを、人生を生きたのは、誰も否定できない客観的事実であったということの意味しております。

だから、聖霊様が私たちに臨まれる時、突然激しい風が吹いたのかとか、炎の塊が臨んだのかとか、鳩が臨んだのかというようなことを問い詰めたり、問いただしたりするのは何の意味もないことですし、つまらない比較や優劣を付けることになり兼ねません。

聖霊のバプテスマの体験は、至って個人的で主観的な体験であり、感触や感覚や感じ方であるため、それぞれの霊的状态やまたは体質と言いましょるか、個人の置かれたところから従って、皆違って当然のことだということです。

ある人には、熱い火のように聖霊が臨まれることもあります。

また、ある人には、台風よりも強い風のように臨んでくださることもあるでしょう。

しかし、ある人には、早朝の静けさよりもはるかに静かで、穏やかにひっそりと望んでくださることもあるでしょう。

聖霊がどのように臨まれるのかを感じるのは、どこまでも、個人的な体験であるしかないということです。

その個人的な体験を絶対化した時に、比較と蔑視と高慢と区別や差別が生じ

てきます。

これよりもはるかに大切に重要なことで、私たちに聖霊が臨んで下さり、聖霊の人となったならば、私たちに共通して表れなければならない結果は、「聖霊に満たされた人生」を生きるということです。

このことにおいては、誰にも、どなたにも、例外はございません。

Part Three

ですが、少なくない人たちが、この「聖霊のバプテスマ」と「聖霊の満たし」を混同しています。

それゆえに、事あるごとに、特に何かの特別集会のような場で、「聖霊のバプテスマ」を繰り返し体験することを望んだり、勧めたりすることがあります。

しかし、「聖霊のバプテスマ」と「聖霊の満たし」は、言葉自体も違うように、その意味も全く違います。

「聖霊のバプテスマ」と「聖霊の満たし」の関係は、あたかも、結婚とその後の愛の夫婦関係と同じです。

結婚というのは、今いる一人の配偶者と一度行う儀式・通過儀礼であります。

結婚25年、結婚50年と祝う銀婚式や金婚式のような特別な時を除き、もうすでに結婚して配偶者となっている人と、気持ちが高まるし気分が良いからと、再び結婚式を執り行ったり、または、毎年の結婚記念日を迎える度に、結婚式を再現する人は、まあ普通はいないでしょう。

結婚は、今ともにいる配偶者と一生涯、一度行う唯一的な儀式です。

でも愛は、たった一回、一度で終わってはなりません。

愛は、たった1回のみ行われるイベントであったり、一度の出会いで終わらせるようなものではありません。

愛すると言って結婚さえすれば、自然と愛が深まるということは決してなく、結婚したために、その瞬間から夫婦は、持続的にもっとさらに深く愛さなければならず、毎日毎日愛の訓練を、練習を重ねて行かなければなりません。

結婚は、各々違う二人の人が、ともに一つの人生を生きていくことであり、ともに一つの人生を生きて行くのに、愛なくしては不可能です。

「聖霊のバプテスマ」と「聖霊の満たし」の関係も、これと同じです。

聖霊のバプテスマは、水で受けるバプテスマ・洗礼のように、基本的に、一生涯にただ一度受けるものです。

もし事あるごとに、聖霊のバプテスマを繰り返し繰り返し体験したいと願う人がいるならば、事あるごとに、結婚した自分の配偶者と繰り返し繰り返し結婚式を行うのと同じくらい、とんだ茶番劇と言いましょうか、呆れた行為になって

しまいます。

「聖霊のバプテスマ」は、人生において唯一的な霊的事件ですが、聖霊のバプテスマを受け、聖霊が臨んでくださったならば、その瞬間から持続的に、「聖霊に満たされた人生」を生きて行く必要があります。

聖霊の満たしのない人生とは、愛の無い夫婦生活が当事者たちの心を荒廃させていくように、キリスト者の霊性を枯渇させ、干からびさせてしまいます。

結婚した夫婦が、持続的にさらに愛し合うことをもって、願う結婚生活を営むことが出来るように、「聖霊の満たし」は、聖霊のバプテスマを受けた人の人生を、キリストの満ち満ちた身丈にまで達する、神の満ちあふれる豊かさにまで満たされる原動力となります。

日本では一般的に、結婚式を執り行う時、新郎新婦は紋付き袴と白無垢の和装に身を包むこともあれば、タキシードとウェディングドレスの洋装だったりします。

式場は、教会の礼拝堂だったり、ホテルの結婚式場だったり、神社だったりがあります。

結婚式の司式は、牧師であったり、神父であったり、神主であったり、または新郎新婦の共通の恩師であったりと、これも多様です。

結婚式は、国や民族によっても違いますし、結婚する当事者たちの趣向や価値観によって、やり方や着る服や式場や司式者はいくらでも違います。

聖霊のバプテスマも、あたかも同じようです。

天地が割れるかのような地響きの中で、聖霊のバプテスマを受けることもあるでしょう。

その場合、自分がいつ聖霊のバプテスマを受けたのかを、日付と時間と状況を確かに把握し、その時を一生涯記憶することも出来るでしょう。

一方で、一片の鳥の羽がゆらゆらと風に揺られて、誰にも気づかれないような静けさとともに、知らないうちに肩に舞い降りるかのように、聖霊のバプテスマを受けることもあるでしょう。

その時の聖霊のバプテスマの当事者は、自分に聖霊が臨んだという事実を感じたり、悟ったりすることが出来ないこともあります。

結婚式と聖霊のバプテスマの形式や方式は、人それぞれ各々違いますが、しかし、その本質は同じです。

結婚式も聖霊のバプテスマも、両方ともに自分の人生に、二つとない転機を迎える事件だということです。

結婚は、それぞれ別のところで生きていた男と女が、これからは二人で共に一

つの人生を生きると、自らの人生に転機を迎え、人生に一線を画す、一線を引くことです。

もし、互いに違う男女が、夫婦として一つのからだとなり、一つの人生を生きて行くという人生における一大転機を拒むような生活をするならば、夫婦は、ただの一つ屋根の下に暮らす同居人でしかなくなってしまいます。

聖霊のバプテスマは、自分自身のためだけに生きていた人が、聖霊なる神様に従って生きるという信仰の転機を迎える事件です。

結婚と聖霊のバプテスマに違いがあるとすれば、結婚は、結婚した当事者たち自らが、自分の人生に転機を迎える、一線を画す出来事である反面、聖霊のバプテスマは、聖霊なる神様によって、私たちの人生に転機を迎えさせていただく恵みだということです。

結婚した夫婦が、結婚した後に、さらに持続的に愛さなければならないのは、それぞれ自分の人生を生きていた二人が一つのからだとなり、一つの人生を生きると、互いの人生に一線を画したからです。

これと同じように、聖霊のバプテスマを受けた者たちが、聖霊に満たされた人生を生きるのは、聖霊様によって、人生の信仰の転機を迎えるよう一線を画す、特別な恵みを受けたからです。

Part Four

するところで、もう一つ疑問が湧いてきます。

私たちそれぞれ一人一人は、果たして、聖霊のバプテスマを受けたのだろうかという疑問です。

聖霊のバプテスマを受ける恵みが、私たち一人一人にもあったのかという疑問です。

この疑問に対する明快な答えを、第一コリント12:3の御言葉が答えてくれます。

コリント人への手紙第一12:3 (パウロ)

この御言葉こそ正確で、公正で、適切な答えです。

私たちのうちどの誰が、2000年前あの中東世界にいらっしゃった主イエス様に直接お会いしたでしょうか？

イエス様が私たちの罪のために十字架に架かれた姿を、私たちのうちどの誰が、肉眼で目の当たりにしたでしょうか？

イエス様が死を打ち破り、復活されるのを、皆さん直接目撃されたでしょうか？

私たちのうちその誰もが、その事実を、自分の目を見た人は誰一人としており

ません。

それにもかかわらず、この方を私たちの人生の救い主として信じています。
この方が私たちの罪のために死なれてから復活されたことを、私たちは確信
しています。

では、どのようにしてでしょうか？

一見、取り留めもないでたらめのように見えるこの話を、私たち、どのように
信じる事が出来るようになったのでしょうか？

どのようにお会いしたこともないイエス様を私たちの人生の主としてお仕え
する人生の転機を迎える事が出来るようになったのでしょうか？

聖霊様が、すでに臨んで下さっているからです。

聖霊なる神様が、私たちの心を震わせ、感動をお与えくださったからです。

たとえ私たちに、突然激しい風が吹いて来なかったとしても、天から炎が下り、
鳩が下って来なかったとしても、もうすでに私たちに聖霊が下り、聖霊のバプテ
スマを受けているからです。

そうでなければ、今この時間、イエス・キリストを私たちの救い主と信じ、こ
の方の名によって、この場所に座ってられるはずがありません。

もちろん、まだイエス様を主だと告白しておられない方々が、この中に、また
オンラインの向こうにいらっしゃると思いますが、その方々はまだ聖霊のバプ
テスマは受けておられないかもしれませんが、その人生が神の御手の中にある
ことは確かな事実です。

あとは、聖霊が臨んで下さるだけです。

聖霊のバプテスマを受ける以前は、自己中心的に自分のことだけを考えなが
ら生きていた微々たる存在に過ぎなかった私たちが、主なる神を、私たちの人生
の主としてお迎えし、この時間、この方の名によって礼拝に出席していること自
体が、聖霊様がもうすでに私たちに臨み、私たちが聖霊のバプテスマを受けた確
固たる証拠であるならば、これから私たちに残された成すべきことは、聖霊に満
たされた人生を追求することです。

Part Five

2000年前のペンテコステの日に、聖霊のバプテスマを受けた弟子たちは、
その後から、聖霊に満たされた人生を生きました。

例えば、イエス様の12弟子のリーダーであったペテロー人を見ましても、聖
霊のバプテスマを受ける前は、イエス様が十字架に架かれる前夜、イエス様の
ことを3度も知らないかと否定したばかりか、イエス様のことをのろい倒すよう
な言葉まで口にする自称クリスチャンでした。

しかし、聖霊のバプテスマを受けたペテロは、先程の第一コリント12:3の御言葉通り、「イエスは、のろわれよ」なんていう言葉を口にすることなどもう二度となく、主イエスのことを恥ずかしがることもなければ、逆さ十字架につけられるまで聖霊とともに、聖霊に満たされた人生を生き抜きました。

「聖霊の満たし」とは、結婚した夫婦が互いに続けて愛し合い、ともに生きていくように、私に臨んでくださった聖霊様とともに生きることです。

私に臨み、私のうちに住んで下さっている聖霊様の導きの中で生きることです。

では、私たちがキリスト者として聖霊様の導きに従って生きるとは、具体的に何を意味するのでしょうか？

ヨハネの福音書16:13を見ますと、イエス様が、聖霊様を「真理の御霊」とお呼びになりながら、「真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導いて下さいます」と明かしておられます。

つまり、私たちが聖霊の導きの中に生きるとは、真理のうちに生きるということです。

じゃ、私たちが真理のうちに生きるとは、具体的にどのようなことでしょうか？

イエス様はかつて、「わたしが道であり、真理であり、いのちです」と仰ったことがありました。

つまり、イエス様の方が真理であり、この方のお言葉全てがロゴス、真理です。

これを踏まえてさらに、ヨハネの福音書14:26では、「聖霊が来られると、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます」と仰いました。

即ち、聖霊の導きに従って生きるとは、真理である主イエス様の御言葉のうちに住まいとどまり、聖霊の助けによって、主イエス様のお言葉に従って生きるということです。

もし神秘的な体験をしたとか、不思議な能力を発揮したとか、徹夜で祈るほどの熱心があったとしても、主の御言葉から離れているならば、聖霊に満たされた人生とは言えません。

逆に、神秘的な体験がなかったとしても、不思議な能力がなかったとしても、ひと晩中祈ることが出来なかったとしても、万事に主の御言葉のうちに住まい、御言葉に従って生きる人ならば、正にその人こそ、聖霊に満たされた人です。

なぜならば、主イエスがお遣わしになった聖霊様は、真理の霊であられ、私たちに真理である主の御言葉を教え、思い起こさせ、主の御言葉のうちに生きるよ

う導いて下さるお方だからです。

だからイエス様は、ヨハネの福音書 20 : 21 - 22 でこのように明かしておられます。

ヨハネの福音書 20 : 21 - 22 (パワポ)

復活されたイエス様は、弟子たちにご自分の息を、呼吸を吹きかけながら、「聖霊を受けなさい」と仰いました。

呼吸は命です。

聖霊の導きの中生きるというのは、イエス様の呼吸、イエス様の命によって生きるということです。

では、私たちのように小さく、低く、俗っぽい罪な人間が、どのように、恐れ多くもイエス・キリストのいのちによって生きることが出来るのでしょうか？
普通ならば、全くもって不可能なことです。

しかし、私たちに臨んで下さった聖霊様ゆえに可能となりました。

聖霊様は、道であり、真理であり、いのちである主イエス様のいのちの御言葉に、私たちを導いて下さいます

私たち聖霊様の助けの中では、イエス様のいのちによってこの世を生きることが出来ます。

私たちが、私たちの朽ち果て無くなっていく私たちのいのちではなく、永遠の真理であられるイエス様のいのちでこの世を生きていく時、私たちの人生は、どれほどに美しく、日々新たにされていくことでしょうか。

「ですから、私たちは落胆しません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています」という使徒パウロの告白が、私たちの告白となります。

ペンテコステの聖霊降臨の出来事が、イエス・キリストを通して人間を救い出そうとされる神のみわざの完結であるというのは、正に、こういう意味です。

Conclusion

2000年前にこの地に降臨された聖霊なる神様は、天からせっかく下りて来られたのに、また天に上って行ってしまわれたお方ではありません。

海を越え、山を越え、遠く遠くにおられるお方でもありません。

聖霊様は、皆さんのうちに、私たちのうちに、私たちの人生のうちに、私たちの心のうち、精神のうち、魂のうちに臨んでおられます。

そして、そんな私たちに残された宿題は、私たちが聖霊に満たされた人生を生きることです。

聖霊様について目覚めていてください。

聖霊に満たされた人生を追求して下さい。

聖霊の導きの中で、主イエス様の、父なる神様の御言葉のうちに住んでください。とどまってください。

聖霊の助けの中で、主の御言葉によって強められ、励まされ、慰められ、主イエス様の呼吸によって呼吸して下さい。

そして、主イエス様のいのちを、主イエス様の人格を、主イエス様の心を頂いて下さい。

主イエスのいのちを着たその時、ようやくついに、日々新しくされていることを実感し、置かれたところで満足と感激を享受することでしょう。

お祈りいたします。

祝祷：ヨハネの福音書 20：22